



engagen^{vol.2}

エンゲージエン

～衣服が記憶するわたしたちの過ごした時間～ 前田博子展

2019.8.22^{thu}—8.25^{sun}

アートベース石引 〒920-0935
金沢市石引2-9-2

11:00—19:00 入場無料

たたんで、ひろげて、 日常は積み重ねられる。

わたしたちは常に衣服を纏い暮らしています。衣服はなくてはならないもののはずが、いつか使い捨てられるようになりました。布や衣服は人と人、人と社会をつなぐものとして技術が開発され、創造されています。2013年4月24日、1000人以上が死亡する事故が起こり、バングラデシュの首都ダッカ近郊の縫製工場に入った商業ビル「ラナ・プラザ」が崩落した事件はファッション業界のみならず、雇用と需要の関係を問われるものとなりました。

わたしたちは物をつくり、ものをつかい、モノに助けられて今日を迎えています。これからもモノとともに歩むからこそ、今後の暮らしの中でモノの在り方、コトの在り方、ヒトの在り方を見直さねばなりません。わたしたちの暮らしは「衣・食・住」を礎として成り立っています。その中でも衣は身体を守ると同時に心をも守っており、欠かせないものです。それをわかっているのにも関わらず、わたしたちが常に着用している衣服は消耗品として扱われがちです。とは言え、衣服がわたしたちの暮らしを支えていることに変わりありません。今日では3R Reduce, Reuse, RecycleにRespectが足され「もったいない」という言葉が世界に広がりました。そしてリサイクルはアップサイクルという言葉で新たに継ぎ産業が動いています。捨てるもの、捨てるモノを再度価値あるものとして提示しようとする試みはわたしたちの祖先が日常的に行ってきたことです。

わたしは、集めた衣服や集まった衣服であらたな衣服を制作してきました。それらはわたしにとって縁のある人のためにつくった日常着や儀礼服です。誰かが着終えた服をまた誰かが着ることで、衣服の記憶が追記されると考え、想いを継ぐという事象を具現化しようとしています。本展覧会は、わたしの近い人たちのためにつくった衣服と、わたしの知らない人が遺した布によるインスタレーションとが混在します。これらは一見関連性のないものだと思われるでしょうが、共通することが1つあります。それら全てが「量んであつた」ということです。わたしたちの量むという行為には小さな約束が込められています。「いつか着るよ」「いつか使うよ」これらの約束を果たす時わたしたちは量んだものを広げるのです。量んで広げ、量んでは広げを繰り返すことで日常を積み重ねています。その重なりによってヒトが過ごした時間や日常が衣服が記憶し記録しています。本研究は衣服や針仕事を通して布や衣服の在り方を模索した研究であり、活動です。「家庭」という中で行われていた家族とのコミュニケーションの在り方が針仕事を通して衣文化を構築してきました。家庭で行われていた祖母や母の従事を教わる小さなコミュニティは「縁」によってつくられた「園」であることから、展覧会タイトルをengage + en = 「engagen」としました。わたしたちを包む衣・服を通して布・服の在り方を省察、考察いただければ幸いです。

—『engagen～衣服が記憶するわたしたちの過ごした時間～』前田博子展

Maeda Hiroko.

可変の衣服／日常着

子どもの成長とともに大きくなる衣服。
衣服が子どもの成長と共に歩み、
成長の傍らでそっと
寄り添いながら日常を記録する。



1 years old

3 years old



七五三の三／七五三衣装

祖母の寝間着。
父から借りたネクタイ。
母がチクチクしたボタン。
ばあちゃんの服がボクへの服に変わり、
衣服に記憶が追加されていく。



24 years old



おもてうらなし おもてなし／結婚式衣装

家族、友人、知人から集めた白い服。
ひとつひとつ解いて組み立てる。
祖母から母へ、母から娘へと教わったことを継ぐように。
母や祖母の日常着が娘の儀礼服へ。
日常の集積が形成したおもてうらなしの服。



見知らぬ女性がのこした空

知らないヒトの衣服や布、生活が閉じ込められた家。
いつか使おうとっておいたであろう誰も使わないもの。
つくりかけの衣服、穴のあいたセーター、量まれた布。
遺した生地から残された想いを空に見立てよう。
量まれたものを広げられれば誰かを守り、彩るモノになる。



赤い衣服のちゃんちゃんこ

赤い布、赤い衣服を集めて
赤いちゃんちゃんこをつくる。
みんなの想いを継ぐことの
施策と実践。

60 years old



赤くなったちゃんちゃんこ

各人が着ていた衣服を
赤く染めて、円にキリトル。
縁からつなぐ円の赤いちゃんちゃんこ。
60歳になった日はみんなで赤い服。



●前田博子展に寄せて

私たちと衣服

須藤 玲子氏 / テキスタイルデザイナー

デザインは、衣服との対話から生まれるという前田博子さん。その作品の題材には、衣服をめぐる所作があらわれている。「量む行為」に着目したおおらかな作風だが、その背景には、現代のテキスタイル、衣服と人間生活、あるいは社会との関わりについての問題提起がある。身体と衣服の関係についての深い洞察は「服は縁が縁」という視点、身体と布の間にできる空間・空気が心身に自由な感覚をもたらす「矢印」の作用という、実にユニークな考えから作品が展開している。私たちが何気なく纏っている衣服について、深く考えるきっかけをもらしてくれた。

人間と文化の問題をあぶり出す。

横山 勝彦氏 / 金沢美術工芸大学大学院専任教授

前田博子さんは、新奇な服を作っているわけではない。日常で着用することのできる衣服を作るのは、それにまつわる人間と文化の問題をあぶり出すためである。衣服の制作を通して彼女は、私たちが通常意識することのない「衣文化」を根本から考え直そうとしている。言葉と同様に衣服は、人間の根幹を支えているという認識から出発し、多彩な制作を展開する彼女に期待している。

福井市美術館での「engagen～衣服が記憶するわたしたちの過ごした時間～ 前田博子展」パンフレットから転載



engagen エンゲージエン vol.2

～衣服が記憶するわたしたちの過ごした時間～ 前田博子展

2019.8.22 thu — 8.25 sun

アートベース石引 11:00 — 19:00 入場無料

〒920-0935 金沢市石引2-9-2



前田 博子

仁愛女子短期大学 准教授
金沢美術工芸大学大学院 博士後期課程

京都造形芸術大学染織コース卒業。金沢美術工芸大学大学院ファッションデザインコース修了。テキスタイルデザイナーを経て、継いで、継いにより継承される衣服文化についての考察を行う。主な展覧会「packing...」[en-ter]

◎お問合せ／仁愛女子短期大学 生活科学学科 生活デザイン専攻 tel.0776-43-6616